

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：37701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720235

研究課題名(和文) 日本語史の知見を生かした九州新方言の文法研究

研究課題名(英文) Grammar research on new dialects in Kyushu based on a study of Japanese language history

研究代表者

松尾 弘徳 (MATSUO, HIRONORI)

鹿児島国際大学・国際文化学部・講師

研究者番号：40423579

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、申請者がこれまでに行ってきた日本語史の研究成果を援用しつつ、「新方言」と呼ばれるものを対象として、九州地域の方言に生じている文法変化の一端を明らかにした。方言が文法変化を生じる際には一定の方向性が見られる。そこで、「方言調査からの実証研究」と「文法変化に関する理論的研究」とを結びつけ、とりたて詞を中心とした九州地方における新方言の文法研究に取り組み、言語変化の方向性に関する考察を行った。日本語文法史研究と方言文法研究の接点を見出せたのではないかと考えている。

研究成果の概要(英文)：Grammatical changes taking place in new dialects in Kyushu have been revealed by a study of the history of the Japanese language. When grammatical changes take place, regularities can be observed. This research focuses on Toritateshi (focus particle) and on the regularities which can be observed when grammatical changes take place. The study was conducted from the points of view of the field demonstrations on new dialects and the theoretical investigations on grammatical changes in Japanese language as a whole. This research also reveals the relationship between studies on the history of Japanese language grammar and studies on the grammars of Japanese dialects.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：新方言 日本語史 とりたて詞

## 1. 研究開始当初の背景

共通語の影響で地域間の方言差が縮まってきた一方で、若い世代が新たに使用するようになった方言語形が存在することも近年指摘されている。それらは「新方言」と呼ばれ、各地域における具体例の紹介も井上・鏜水(2002)などによりなされてきている。

研究代表者はこれまで主として近世前期筆録の狂言資料を用いて日本語文法史の解明を行ってきた(松尾(2003)(2008)など)が、本研究では、日本語史の知見を生かした新方言の研究に取り組むこととした。

日本語史的観点を踏まえた方言研究としては、迫野虔徳(1998)、小林隆(2004)など優れたものがあるが、本研究では近年の現代日本語研究で活発に取り上げられるようになった「とりたて詞」について、日本語文法史の観点を踏まえた研究をおこなうことを目指した。とりたて詞とは、文構成には直接関与しない任意の要素で、もっぱらとりたての機能を果たす助詞の一群を指す。現代日本語には「だけ」「も」「さえ」「こそ」などのとりたて詞があり、細かな意味用法の相違に迫る研究も増えつつある。

それに対して、日本語諸方言のとりたて詞に関しては、共通語とは異なるとりたて詞が存するにも関わらず、いまだ十分な調査が行われてはいないという現在の学術的背景があった。

研究代表者が主として調査を進める福岡の新方言ゲナもとりたて詞として興味深いふるまいを示しており、本研究は方言文法研究と現代日本語研究、さらに日本語史研究にも大きな貢献をなしうと考えた。

### 引用文献

- 井上史雄・鏜水兼貴(2002)『辞典 新しい日本語』東洋書林  
九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房  
小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房  
迫野虔徳(1998)『文献方言史研究』清文堂

### 拙論

- 松尾弘徳(2003)「狂言台本における二重否定の当為表現 - 大蔵流虎明本・版本狂言記を中心に - 」『語文研究』95  
松尾弘徳(2008)「因由形式の包含関係から見た天理図書館蔵『狂言六義』」『文献探究』46

## 2. 研究の目的

本研究課題が主対象とするのは、福岡方言におけるゲナというとりたて詞である。現在福岡市周辺域においては、下の(1)(2)のように、ゲナという形式を「否定的特立」というとりたて詞用法で用いる現象が若年層に

広がっている。共通語では「トカ」「ナンカ」「ナンテ」が相当しよう。

- (1) 納豆げな食わんよ。
- (2) そんなことがあつたげな、知らんかった。  
(いずれも福岡市 20 代男女の使用例)

しかしながら、老年層が用いるゲナは(3)のようにもっぱら文末に現れる伝聞形式である。

- (3) その家で赤ん坊が生まれたげな。(九州方言学会編(1991)調査文例)

つまり、「老年層が伝聞の助動詞相当のものとして用いていた形式を、若年層はとりたて詞という助詞相当のものに転化させた」ということであり、非常に興味深い言語変化の事例である。ところが、福岡の若年層が用いるゲナについては「若者の新方言」としての報告はなされているが、管見の限り「助動詞からとりたて詞へ」という文法変化の過程を考察したものはない。

この過程の一端についてはすでに報告を行ったところであった(松尾(2009))が、まだまだ研究途上のテーマである。そこで、研究期間内に次のようなことを明らかにしたいと考えた。

- (1) 福岡方言におけるとりたて詞の文法体系
- (2) とりたて詞ゲナの成立過程に関する詳論
- (3) 鹿児島方言など、福岡県以外の九州地域における新方言の調査および究明

これらを明らかにし、新方言の研究分野からの、現代語・古代語両面に対する日本語文法研究への寄与を目指した。

本研究課題は特に日本語史研究と方言研究両面への貢献が可能であり、ここに本研究の学術的特色があると考えている。とくにこれまでの日本語史研究や方言研究に欠けていたとされる、「言語変化の理由」を明らかにすることを目指すものであった。

ゲナという形式が、中世～近世の中央語において「～ゲナリ」という様態(=～そうだ)用法から転じて伝聞相当の意味を持つに至ったことは、文献資料から確認できる。この伝聞用法は後の中央語では別形式(～ダソウダ etc.)に取ってかわられたが、現在でも九州方言には残存している。ここまでは「古語は辺境に残る」の格言さながらなのであるが、興味深いのは福岡方言においては、独自にとりたて詞用法を生じさせ、新方言を生じさせた点である。

研究代表者は福岡新方言としてのゲナの成立過程に関し、下のモデルのような見通しを立てており、研究期間内にこのモデルの裏

付けを行っていくこととした。

#### 【予想されるゲナ用法変遷モデル】

様態ゲナ 伝聞ゲナ

引用ゲナ とりたて詞ゲナ

また、このような変化は、一部地域の方言のみに生じた単なる散発的現象ではない。助動詞相当のものが、何段階かのプロセスを経て助詞相当のものとなるという変化はゲナに限ったことではなく、じつは中央語の中にもそのような例を見いだせるのである。

- (1) 田中なり山口なり(学生)を呼んでこい。
- (2) 田中やら山口やら(学生)を呼んできた。
- (3) 立ったり座ったり(意味のない事)を繰り返す。

: すべて Kinuhata et al(2006)より引用

これらナリ・タリ・ヤラはもともと助動詞相当語句として機能していたものであるが、現代においては例示並列機能を持つとりたて詞相当の機能を有している。このような日本語史研究の成果との接点を本研究は有していると考えられる。方言研究にとどまらず、文法変化に関する史的研究への寄与が可能な点において、本研究は大きな意義がある。

以上、本研究では期間内に「方言調査からの実証研究」と「文法変化に関する理論的研究」とを結びつけ、とりたて詞を中心とした九州地方における新方言の文法研究に取り組みたいと考えた。

#### 引用文献

Kinuhata Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Eguchi, and Satoshi Kinsui(2006) "Genesis of Indeterminate Pattern in Japanese" The 16th Japanese / Korean Linguistics Conference, Kyoto University, 2006年10月7日発表資料

#### 拙論

松尾弘徳(2009)「新方言としてのとりたて詞ゲナの成立 - 福岡方言における文法変化の一事例 - 」『語文研究』107

### 3. 研究の方法

日本語諸方言における文法システムは、地域ごとに異なる可能性がある。そのため、問題とするとりたて詞などの文法システムが当該地域でどうなっているのかをまずは明確にさせておく必要があり、アンケートや面接などの方法を用いた方言調査を入念におこなうこととした。その上で、文献資料から探ることのできる中央語の文法体系の変遷との相違点および共通点を明らかにしたいと考えた。このように、本研究の遂行のためには方言調査と文献調査の両面にわたる丹

念なアプローチを要する。

方言研究に関しては、主として福岡若年層のとりたて詞ゲナなど九州地域に見られる新方言の解明を当面の中心課題に据えた。また文献調査に関しては狂言資料や抄物資料をはじめとする近代語資料(室町~江戸期以降成立の口語資料)から日本語の歴史を探ってゆき、そこから窺える言語変化の方向性を鑑みた上での方言文法研究との接点を探ることを試みた。

### 4. 研究成果

本研究の主な成果は下記の2点である。

- (1) 福岡方言のとりたて詞ゲナおよびヤラに関する研究

福岡方言にみられるとりたて詞ヤラとゲナの意味用法の相違が、それぞれの成立過程と深く関わっていることを明らかにした。ヤラ、ゲナともにもと文末形式であったものが文中で用いられるとりたて詞となったという点においては共通の文法変化と見てよい。ただし、ヤラは並列用法からの派生、ゲナは引用用法からの派生と考えられ、その成立過程の相違が、ヤラは「擬似的例示」、いっぽうゲナは「否定的特立」という、とりたて方に関する意味用法の相違を生んだものと考えられる。

このように、日本語史的知見を生かしながら新方言の成立過程を論じた点に、本研究の独創性がある。

なお、この内容に関しては松尾(2013)として論文化した。

- (2) 鹿児島における新方言の調査

研究代表者が研究期間である3年間にわたって所属大学のゼミナールでおこなってきた鹿児島県における方言調査の概略をまとめた。とくにフィールドワーク教育という観点からみたときに方言調査がどのような意義を持つのかという、教育面と研究面とのつながりを論じた。

この内容をまとめた松尾(2014)では、若年層への聞き取り調査から得られたデータに着目することで鹿児島の伝統的方言がどのように変容しつつあるかを述べており、この点において研究課題である「新方言」の文法研究との関連性を有する。

上記2点の研究成果については、いずれも本研究課題の中核をなす「九州地域における新方言」の解明にある。若い世代に特徴的な新方言を明らかにするためには世代間の方言比較が必要不可欠である。また、新方言の実態を探るためには、世代間の相違のみなら

ず地域間の相違も考慮しなければならない。このような視点からの研究をおこなうことで福岡県および鹿児島県内における言語変化の様相が明らかにでき、このことにより日本語学界の方言研究委寄与できたものと考えている。

今後の展望としては、研究期間内に十分な考察を進めることができなかった鹿児島方言にみられる新方言の解明を進めてゆきたい。とくに、同意要求表現のセン、相づち表現のダカラヨ(例、「今日はいい天気だせん?【いい天気だよね】」「だからよ」「そうだね」といったものの成立過程について、検討を進めたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

松尾弘徳「鹿児島県内方言調査から見えること フィールドワーク教育としての方言調査の意義」、『鹿児島国際大学 国際文化学部論集』第 14 巻 4 号、査読有、2014、pp.303-315

松尾弘徳「福岡方言のとりたて詞『ヤラ』『ゲナ』の成立をめぐって」、『文献探究』51 号、査読無、2013、pp.42-52

[学会発表](計 2 件)

松尾弘徳「若者が使う『新方言』」, かがし県民大学連携講座「世界の『新文化』を見る・聞く」, 2013 年 2 月 17 日, かがし県民交流センター

松尾弘徳「狂言資料に見られる当為表現形式」, 文法史研究会, 2011 年 7 月 16 日, 九州大学サテライトオフィス

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

松尾 弘徳 (MATSUO, Hironori)  
鹿児島国際大学・国際文化学部・講師  
研究者番号: 40423579